

パネルディスカッション

川の宝ものってなあに？

この報告書は、2003年5月24日(土)、只見町「季の郷 湯ら里」において行われたパネルディスカッションを採録し、編集したものです。

出席された
みなさんの
プロフィール



コーディネーター

遠藤由美子 (えんどう・ゆみこ)
1949年福島県三島町生まれ。郡山女子大学短期大学部生活芸術科卒業後、フリーライターを経てUターン。1992～1997年、昭和村からむし織の振興に携わる。1998年奥会津書房設立、編集長となる。日本の原風景を地域の人々と見つめ直し、伝えていくため出版を中心とした様々な活動を行っている。三島町公報員。



パネラー

鈴木和次郎 (すずき・わじろう)

1950年生まれ。宇都宮大学大学院農学研究所(修士課程終了)、北見管林局計画課を経て林業試験場、森林総合研究所、現在、同所森林植生研究領域主任研究官。専門は林地雑草木の生態。水辺林管理。著書に『溪流生態砂防学』(共著・東大出版会・1999年)、『環境修復のための生態工学』(共著・講談社・2000年)など。



パネラー

小沼信孝 (おぬま・のぶたか)

1960年只見町生まれ。只見養魚場勤務。唱若衆会(とのうわかしゅうかい)の会長として様々な活動を展開。なかでも黒谷川の鯉のぼりは、春の風物詩として定着している。2002年、只見町朝日地区センター主催の「かじっかの学校」で、講師として黒谷川の生き物調査や水質検査などを地元の子供たちに指導した。



パネラー

岡村 健 (おかむら・けん)

フリーライター。1938年生まれ。1964年朝日新聞社に入社、各地で記者生活。定年にあわせて南会津郡田島町に移住した。定年前の4年間は、公共事業による環境破壊や税金の無駄遣いの問題を重点的に取材した。編著に『田舎暮らしの達人たち』(晶文社)。NPO法人「南会津グリーンストッククラブ」会員。



パネラー

佐藤弘吉 (さとう・ひろよし)

1955年只見町生まれ。大工。子どもの頃は自宅近くの川が格好の遊び場だった。大工修行のため7年間東京で暮らしたが、山と川に囲まれた只見町こそ生活の場と考えている。「木は材になっても生きている」がモットー。NACS-J自然観察指導員。「只見の自然に学ぶ会」幹事、自然観察会などで地元の子どもたちを指導している。



川の宝ものってなあに? 水辺林再発見プロジェクト

プログラム

講演とパネルディスカッション

2003年5月24日(土)

只見町「季の郷 湯ら里」において

水辺探検隊 in 黒谷川

2003年5月25日(日)

黒谷川の水辺林観察会

主催：只見の自然に学ぶ会

文中の敬称を略させていただきました。

遠藤 ● 鈴木さんのお話は、いかにして水辺の環境をとりもどすのか、という強烈な問いかけでありました。この基調講演の中にもありましたとおり、人間は利水・治水を一生懸命やってきたわけですが、いまそれによって、自分の首を真綿でしめるような弊害も非常に深刻になってきてしまいました。今回の議論は、その弊害を生み出してきた私達の意識そのものを、もう一度問い直そうという試みでもあります。

自然を、資源として見始めた頃から、私達のこの意識がだんだん変わってきたように思います。自然との共生、あり得ないことなんです、うすっぺらなこの概念が私達の意識をさらに変えて行ってしまったような気がします。

本日は、短い時間ですが、皆様の意見を効率的に聞くための交通整理係を努めさせていただきます。

まず、只見町は水の郷といわれてますけれども、この只見町にずっと住んでいらっしゃった方の生の声を聞きたいと思います。佐藤さん、「川の宝もの」というのが今回のテーマですが、ずばり、川の宝ものって、一体何物だ、と思っておいででしょうか。

佐藤 ● 私は、伊南川のほとりに住んで40年以上になるんですが、ずっと川は遊び場であり、プールであり、広場でした。川にもぐったり、一番の遊び場でありました。今は、川で遊ぶ人が本当に少なくなってきたと感じています。

遠藤 ● 本当に、今は川で子供が遊ぶことが少なくなっています。

子供達と一緒に、川で遊ぼうとする取り組みをなさっている小沼さん、いかがでしょうか。

小沼 ●私にとっての川の宝ものとは、これは水辺林みずべりんとも関連があるのですが、川の生物の中でも基礎生産者と呼ばれる珪藻類けいそう、これが川にとっては非常に大事だ、と考えています。

遠藤 ●それでは、長らくジャーナリズムに関わってきた岡村さん、いかがでしょうか。

岡村 ●私は略歴にも書きましたように、定年前の4年あまりは河川ばかり、ダムの話とかを追っかけていました。私は佐藤さん達みたいにあまり自然環境の良いところに育ってなくて、新聞記者時代に飲み屋の親父に山小屋につれていってもらい、釣りを始めた時に、初めて自然とはこんなに良いものか、とわかってから関心を持ち始めました。

そのとき、釣りの仲間が、ああ、あそこの川はもうだめだ、あそこに砂防ダムができた、とか、あそこの川は三面張りになってもうだめだ、とか話しているのを聞きました。それから忙しさですっと川からは遠ざかっていたんですが、でもどうして川がこんなにだめになっていくんだろうということはずっと考えていました。これが最後の4年間、ダムの話を追っかけていくことになったきっかけかなと考えています。

遠藤 ●それでは鈴木さん、お疲れでしょうがもう一言。

鈴木 ●川を単に水の流れとして考えるのではなくて、水と水辺林と

陸域の環境、それが総合化されて水辺の自然環境を形成しており、その存在自身とその役割自体が重要であると思います。

遠藤 ●それでは、さきほど珪藻類が重要だとおっしゃった小沼さん、もう少し詳しく教えて下さい。

小沼 ●珪藻類と言うのは、簡単に言うと水の中の水コケですね。一番生物の底辺になって、水コケを昆虫が食べて、その昆虫を魚が食べる。今はこのコケが、家庭排水などによって水が富栄養化ふえいようかすることにより、成長が良くなりすぎちゃっています。

コケが大きく成長し、伸びる。そして枯れる。そうすると水が汚れる。虫がいなくなる。そして魚もいなくなる。河川改修により川幅が広がってきて流れがゆるくなってくる。そして直射日光を遮る水辺林もなくなってくる。そして珪藻類はますます光合成をして成長する、という悪循環に陥っていると思います。一番大事なのはこの珪藻類じゃないかと考えています。

遠藤 ●珪藻類を健全に育ててきた水辺林、ということですが、柳は魚の寝床だよ、という話をさきほど伺いました佐藤さん、いかがでしょうか。

佐藤 ●私も昔よく川にもぐったんですが、柳などの木の中に魚がいることが多くて、魚も隠れるためにそういう所にいるんだと思うんですが、魚釣りでもそういうところをあたりまえにねらいますね。水の流れに変化があって、木に物がひっかかったりするから魚が住める、そういうことが川が生きている、ということなんじゃないか

と思います。

遠藤●ついでにお伺いしたいんですが、川が昔と違っているところを、昔の川を知っている方としてどう感じますか。

佐藤●昔は、どこからでもすぐ川におりられたんですが、今は川のそばが急な段差になっていて、行き来できない。それに川の流れが急になったと思います。

遠藤●鈴木さん、川の流れが急になったということなんですが、その実状をもう少し詳しくお話し下さい。

鈴木●私は陸域の話が専門で、的確には答えられないんですが、昔の川は蛇行していて瀬と淵があり、上流域には水量を調節するダムもなかったということと関連はあるかもしれませんが、逆に通常の流量が減ってしまった川もあるので、一概には言えず、ケースバイケースだと思います。

遠藤●その流れが速くなったというのは、どういうことなのでしょう。上流に砂防ダムができたり、川に護岸ができたりしたことが原因で、水がストレートに下流に流れるということなのでしょうか。

佐藤●川が直線的になってきてるな、と感じます。前は川の中に深いところ、こちらでは「ズボ」というんですが、があり、瀬があり、魚があそこにいるな、ということも想像できたんですが、今は川がストレートに流れていて、そういう瀬や淵がなくなったことが原因だと思います。

遠藤●岡村さん、川の取材の中で、欧米の川に対する政府的な取り

組みや、その現状などもご存知と思うんですが、今回の只見町に引用できる事例などをお聞きしたいんですが。

岡村●私が取材していたのは、ダム事業に反対しているN G Oの方々だったんですが、この方々はよく勉強されていて、日本のダム政策、河川政策はおかしい、と感じていました。その方々が勉強されていたのが、欧米の河川政策でありました。

昨年ヨーロッパで千年に一度という大洪水がありましたが、そのようなことが起これば、日本で考えるとダムをもっとつくれとか、堤防を高くしろとかの話になると思うんですが、逆でありまして、もう20年ほど前から、河川の再自然化を河川行政の核として取り組んでいます。

ライン川などは、日本の川とはスケールが異なり、アルプスのふもとからオランダまで長い距離を流れる河川ですが、途中でそのあちこちで船運のため、発電のために直線化されていました。このために洪水を下流に早く流す結果となり、下流の一番都市が発達した地域で洪水が頻発する事態になったため、川の再自然化を進めなくてはいけなく、ということになったわけです。

もちろんその場合いろいろな利害が対立するわけですが、ヨーロッパ特有の、妥協点をさぐるやりかたで調整を行い、河畔林かはんりんというよりもっとスケールの大きい「氾濫原はんらんげん」を取り戻せるところは取り戻そう、ということをやったわけです。それはもちろん治水上もいいし、環境にもよい。また水質の点でも、ウィスキーやワインの原

料となっている地下水の水量がもどってきた、ということもあり、いいことばかりだったわけです。

それで我が国でも、こういう事例を受けて、「多自然型川づくり」という川の再自然化に取り組み始めたわけです。

遠藤 ●川の中にすんでいる生き物たちがだんだんいなくなってしまう……。小沼さん、カジカなどの魚の気持ちを代弁してもらえないでしょうか。

小沼 ●水辺林がなくなることによって、あるいは家庭雑排水や農薬を含んだ農業排水を河川に流すことによって水が富栄養化し、珪藻類が異常繁殖する。

もう少しで、伊南川などに鮎を放流する時期になりますが、放流する鮎は、九州とか関西から飛行機やトラックに乗って持ってきます。そして伊南川で成長するわけですが、えさになる藻がいっぱいあるため、他の鮎と餌の取り合いで競争する必要がない。それで、7月20日に解禁になって、釣人が来て、友釣をするんですが、ほかの鮎を追い払わない。追い払う必要がないわけです。それで釣れない。また藻はたくさんあるんですが、腐るほうが多くて水質が悪化する。そうすると鮎はあまり成長できない。これが最近、伊南川の鮎が小さくなった、釣れなくなったという原因ではないかと思います。それに先ほどカジカという話がでしたが、カジカはちょうど今ごろ(5月)卵からかえります。石の裏に卵を産みつけるわけですが、川が直線化し流れが速いものですから石の裏に砂や砂利が入り込ん



パネラーのみなさん

でしまい、卵を産みつける場所がないんですよ。それがカジカの減少につながっています。

そしてせっかく少し卵を産みつけても、河川改修で川がいじられてしまう。今は鮎漁への配慮もあって冬期間しか工事ができないということもあり、ちょうど卵を産みつけた後に別なところに水を回してしまうもんですから、卵がかえれない。只見にすんでいる魚にとっては、本当にすみにくい世の中になっていると感じます。

遠藤 ●先ほど鈴木さんが洪水のあとに川が荒れたため、魚が大量に

発生したということをおっしゃられましたが、そのことについて聞かせてください。

鈴木 ● 魚の生態学上では常識なんですが、川で洪水が発生して川が荒れる、攪乱かくらんされるとということにより、石が洗い流されて藻が新しくなる、そして水棲昆虫が大発生し、それを食べる魚が大発生するということが、サケ・マス漁で一般的に起きている現象であり、アメリカの学者の間の定説になっています。

川に洪水が起き、川が荒れるというのはあたりまえのことで、融雪洪水や梅雨の洪水など年に何回か洪水があり、むしろそれを利用して水棲昆虫などが生きていくということです。川が荒れるというのは言葉は悪いんですが、自然界では川の攪乱というのは折り込み済みということが言えるんじゃないでしょうか。

遠藤 ● 今までは洪水から人間を守るための治水、産業のための利水というのが非常に大事にされてきましたが、最近国の考え方が、これまでの治水・利水から自然環境の保全へと大きく変わりつつあるという話がありますが、岡村さんにそのへんの話をお願いします。

岡村 ● 先ほどヨーロッパでの川の再自然化という話をしましたけれども、日本は明治維新以来、ヨーロッパから近代的な河川工法を導入し、河川改修を行ってきました。明治29年、100年ほど前に旧河川法が制定され、方針としては水を川の中に閉じ込めて、一刻も早く下流に流してしまう、そしてダムである程度流量を少なくする、洪水が超えないように堤防を高くする、こういう100年の歴史が

あったわけです。これはこれである役割を果たしたんですが、このことによって、まっ平らな川、魚のすめない川がたくさんできてしまった。またダムによって魚の行き来ができない川になってしまった。只見川にダムができたのは昭和4年だそうですが、その前には多分マス釣りができた。話によるとマスを釣ったことがある方がまだ一人おられるそうですが、只見川では国策の電源開発のために、早い時期からたくさんのダムができ、川が寸断された。本流の阿賀野川あがのでは昭和30年頃までマス釣りができた。川というものが海とつながって生きていた。

ダムを壊して海につなげるかどうかは別として、水を川の中に閉じ込めるだけではだめだ、ということで、1997年、旧河川法から100年経って、河川法の改正がされました。どこが変わったかというと、目的が治水、利水の二つに加えて、「河川環境の保全」という内容が追加された。もうひとつは、いままで川のことは国が決める、とされていたのが、地元の市町村や住民の意見、流域の人たちの意見を反映しよう、という内容に変わったことです。

さらに昨年、自然再生推進法というものが制定されて、なくしてしまった自然を取り戻そう、という大きな流れができてきて、只見町にとってもいい方向が見出せるようになってきたのではないかと思います。

遠藤 ● 川のつくり方について、今までは住民から遠いところで決められていたのが、今度は「こういう川にしたいんだ」という流域の

人たちの意識一つで変わっていくかもしれない、という大きな望みが出てきたと考えてよろしいのでしょうか。

岡村 ●例を申し上げますと、私の友人のC・W・ニコルさんの家の近くに鳥居川という川があるんですが、一級河川で、すごくいい溪流です。そこで水害が起きまして、災害復旧で川を直線化することになりました。そこに海外からニコルさんが帰ってきて、見るとブルドーザーで川をいじり、水辺林を切っている。あまりにひどいじゃないか、と彼が烈火のごとく怒った。そのことを僕は新聞に書いたわけです。

その後住民が声を上げた。僕がそれまでに取り上げてきたのは、長良川河口堰^(註1)や細河内ダム^(註2)に反対する運動であって、目の前の川の工事について住民が文句をいうということはあまりなかったので大きな反響を呼びました。

そこで、もうつくってしまったものは仕方ないけれども、残りの計画を見直したわけです。たとえばニコルさんの家の前には堤防をつくりましたけれども、対岸はちょうど川のカーブの内側になっていて河畔林がある。その位置にがんじょうな堤防をつくる必要はない。そこで堤防の位置を河畔林の外側にずらしてつくったりしました。そして、ヨーロッパで合理的な近自然型工法を学んだ民間の研究者である「ことねしゅういち」さんという方を招いて、この方は国土交通省の方とも話をしながら、計画の見直しをした。この方は、堤防をつくってしまったところはしょうがない。その中の水の流れを



黒谷川モチツボ沢出合付近の溪畔林

きちんとやれば、相当魚はすめるようになる。というので、川の流れを読んで、流りたいところに流してやる。そしてそこに巨石、水制工というんですが、それで川の向きを変え、また自然の流れにもどしてやる。そういう工夫をほどこしたわけです。その結果、いまではカジカがもどる。いろんな植物が生える、という状況となり、ニコルさんも安心したようです。

このケースは、有名人が住民であったこともあるでしょうけど、やはりそこに住む方が、「これではいくらなんでもいやだよ」とはつきりと言わなければ、変わらないんじゃないか、ということだと思

います。

遠藤●川の流れを、あれはだめこれはだめとしてしまうのが、川にとってよくない、ということなんですか。

佐藤さん、今、只見町の水辺のヤナギなどの木々が芽吹く時期で、とてもきれいだと感じますが、ヤナギがじゃまだと感じられることってあるんでしょうか。じゃまと感じられるから切られてしまうんだと思うんですが。

佐藤●先日、「南東北川のワークショップ」^(註3)という会議に出席して、いろいろな東北の川の話聞いてきたんですが、ほとんどが水路みたいな川の汚れをEM菌^(註4)できれいにする、みたいな話で、自分たちの川のようなケースの話はありませんでした。その話を聞いて、自分たちの川がこんなにもすばらしかったんだ、という事に、普段何気なく見ている物の良さに気づきました。

川に大水が出れば、ヤナギにごみが引っかかるのは当然の話です。だからヤナギはじゃまだ、と思われるんですが、じゃまな物と思う前に、それを皆で掃除するぐらいの気持ちを持たなければいけないと思っています。

春一番先に花が咲くヤナギは、とてもきれいです。雪が多い地方に住んでいると、ヤナギの花が咲いた、ああ春が来るんだなあ、という感じがするんで、いつまでもヤナギがあって欲しいな、と思います。

遠藤●いままでは河畔林は、じゃまだという事で簡単に切られるこ

とが多くて、お魚さんもほんとうにつらい思いをされたんだと思いますが、小沼さん、さきほどの鈴木さんの講演での問いかけに対する本題に入りたいと思うのですが、お魚さんの立場としては、どのようにしたら良いのでしょうか。

小沼●水辺林の木にしても、ヤナギの木1本だけが生えているのではなくて、その下には下草も生える。この下草は、水質浄化の面でも、根から川の水の養分を吸収することで相当役に立っており、魚や水棲昆虫にとっては大切な役割を持っている。

さきほどのスライドにもあったんですが、川に護岸をつくり、護岸から離れたところに木がある。たしかに緑はあるんですが、川の中の生き物にとっては少しも役に立たない。やはり川の中に木が立っている、その根からまた新しい根が生えてくるということになれば、水質の浄化には非常に効果があると思います。

ゴミが引っかかって日陰ができる、だからそこに魚が住める。じゃまなようでも川の中にいるものにとってはそれは非常にいいものなんだ、ということをもっと認識していく必要があると感じます。

遠藤●これは必要だ、これは必要ないんだ、という選択を人間の立場だけでしてはいけない、というお話でありました。岡村さん、私達人間は一体どのようにすればよろしいんでしょうか。私達生活者自身が水を汚してはいけない、ということは基本なんですけれど、地域の人たちだけで解決できる問題ではないと思うんです。どういった力が必要なんですか。

岡村 ● 魚にとって必要だ、というだけではないと思います。川から人間が離れていってしまった、ということが問題で、日本人は川の民、と言っていた人がいましたが、日本人は実によく川で遊び、川とともに生きていた。50代ぐらいの人だと、学校から帰ってくるとすぐ川に行った、と言う話を聞くんですが、そのような風景は遠い昔になってしまった。なぜそうってしまったのか。

やはり川と人間を分断して、安全にして、それが近代ということである。川の水なんか飲まないで水道の水を飲め、という考えの時代があったんだと思います。

昭和村に野尻^{のじり}川という川があります。ちょうど手頃な大きさの川が村の中を流れている。今では高い護岸のはるか下の方を水が流れています。昔はみな川で農機具を洗っていた。川の中にはいって行って農機具を洗う、そんなことがどこでもできた。せっかくあった川とのつながりを、コンクリートの護岸にするからといってなくしてしまう。農機具洗うなんて、と言う人がいるかもしれませんが、ぼくもたまに農機具を洗うんですが、水道の水では落ちなくて大変ですよ。ですが川の中に農機具をぽんと置いて、しばらくすればきれいになる。一日の仕事が終わった、という風景の中に川があった。魚だけではなくて、昔は人間も川に癒されていたのではないかと、ということをもみんなが気づくことが大事で、そういうことも含めて川に関わる人たちが話し合えれば良いのではないかと感じます。先ほどのニコルさんの話の続きですが、長野県の職員の方々が、そ



春4月、只見の春はヤナギの新緑からはじまる

の工事をやった後に、県の建設業協会の方々、実際に川をいじる人たちと一緒に、現場を指導した方の所に行って、近自然型工法を勉強したそうです。こうなってくるとかなりいい方向に行くのではないかと。県にも、県の建設事務所にも勉強している方もいる。そういう方をきっかけとして、ここの町のここを少しなんとかしよう、ということをご提案すれば、実現はできるんじゃないかと思います。

遠藤 ● みなさんのお話を聞くと、今回のこの会は画期的なものであったと感じます。みなさんの話を聞いて、こちらに生活されている方々は、本当はみんなこの風景が大好きなんだと思えたんですが、

その思いにエールをおくるような締め言葉の言葉を鈴木さんから頂きたいと思います。

鈴木 ●なんて答えていいかわからないんですが、みなさんの話を聞いてみると、只見町の人たちにとっては川は非常に大きな存在であると感じました。電源開発でダムがつくられたり、住民の方々の生命財産を守るために治水や砂防事業が行われる。農業振興のために川の水もとことん利用する。というなかで、川と陸域の間にあった河畔林が大きな変化をしていった。本来の川と人間がどうつきあっていくか、ということは非常に難しいことです。自然の河川は人間にとって必ずしも好ましい存在ではありません。今はダムで流量をある程度コントロールしているんですが、自然河川が暴れるというのは、自然の中では当たり前のことで、これと人間がどうつきあっていくのか、うまく調整しながら暮らしていくというのは本当に難しい。水辺林を再生する、保存していくということを進めるときには、この問題にかならず突き当たります。

今言えることは、なくなってしまったものほともかく、今残されている水辺林をなんとか守って残していくということを最大の課題にしていかななくてはいけない。再生するということは人間がやることではなくて自然がやることです。いまのコンクリートの構造物だって、人間が一切手をつけなければ30年あれば元に戻る。しかし人間が生活していく上では、利便性を追求しますからさらに水辺林に手をつけ、なくしていってしまう。

水辺林を残し、再生していくのは私達の意識次第なんですけど、ほんとうに再生していくのは自然です。ある程度自然を信頼し、多少不便を感じても、大局的な考えをもってある程度は我慢していく。そのことが大事なんではないかな、と思います。

遠藤 ●自然を信頼していく、この自然にこれ以上手を付けずに、私達人間は、不便と思ってもぐっとこらえていく。そうすることによって、この生物の宝庫である水辺林の中の生き物たちに、生物の1種の仲間として、加わることができるのかもしれませんが。そうすることができるよう、今残されている自然の川を、後の時代に残せるように大切にしていって、それが今回の提言といえるのではないかと思います。それでは皆様、長時間ありがとうございました。

[註]

註1：長良川河口堰／建設反対運動の広がりの中で1995年に運用された河口堰。現在も河口堰のゲートを上げるための運動が続いている。

註2：細河内ダム／徳島県木頭村に計画されたダム。30年にわたる反対運動の結果、2000年に建設が中止された。

註3：南東北川のワークショップ／正式には、「第3回南東北『川』ワークショップ」。2002年11月30日～12月1日に「東北の川ワークショップ」実行委員会により福島市で開催。市民、行政がともに川や水辺に関わる実践事例を発表しあい、より良い水文化・川文化を見つけ出すワークショップ。

註4：EM菌／EMとはEffective（有用な）Microorganisms（微生物群）の略。微生物の働きで川や湖を浄化するなど、いろいろな用途に使われる。

- 編集：只見の自然に学ぶ会
- 許可なく転載を禁じます